

インデイスティンクト

+Q

第18話 来ることができた後

庫発りべるき

## 〈はじめに〉

本書をお読みになる前に付属の利用上の注意  
をご確認ください。

〈追加注意事項〉 この物語はフィクション  
です。実際の事件・人物・団体などとは関係あ  
りません。

## 〈本編開始〉

俺はある意味工作員になった、三十八歳の男  
性。

何者かに工作行為を指示されたわけではなく、  
命令を受けたわけでもない。

そもそも、工作員を必要とする機関と関わっ  
ているわけではない。

そういった機関がこんな状態の俺を使いたい  
とも思えない——別に構わないが。

俺の職業は会社員。職種は工作員とは程遠い  
ものである。

そして俺は…自分の勤務先の会社員としての  
機能が減少したことがあった。

仕事に不安要素があり、それをきっかけに薬

を飲む必要が出てきた。

状況は良くならず、医師が処方する薬の種類は増加。

俺は勤務先の会社に相談した。薬が増えても解決しないことも伝えた。

そのときは何とかしてもらうことができた。

上司を含めた周囲の人々も、俺に対してそれなりに接してくれた。

とは言え、飲むべき薬の量が減るほど事態が好転したわけではなかった。

薬を飲んでいれば不安要素に伴う症状が悪化しない、という程度の状況だった。

悪くはない状況だった。

何とかなるか、と思っていた。

……その時が来るまでは。

「会社が現状を踏まえて人員配置の見直しをし

たいと考えている」

上司は俺にそう告げた。そして続けた。

内容は人事異動についてだった。その対象が俺になるという。

異動自体は驚くものではないのかもしれない。事業者や公的機関などが組織の状況を踏まえておこなう一般的な手法である。

この会社のことを考えると、俺が異動の対象になることもあるかもしれない。

そこまでは考えていた。

異動の話の時点である程度の不安はあった。

ただ、その不安については環境の変化に伴うよくあるものとして認識していた。

ましてや「ある意味での作業員」に変貌を遂げることなど、考えもしなかった。

そして異動の日。

異動前、異動後の双方の部署でそれなりに挨拶を交わした。

異動後の部署で、その上司が俺が新しく配属されたことを部署の人たちに伝えていく。

そのとき俺がその部署に抱いた印象は：

（悪くはない。こんな自分でも地道にやっていけば何とかなるだろう）

実際その部署の人たちは、俺が仕事に関する不安要素で薬を飲むことになったことを知っていたようであり、かといってそれで人間関係に悪影響を起こすことはなさそうだった。

しかし：

俺が抱いた印象はわずかな日数で崩壊することになる。

作業を無理をしてまで急がせようと迫るような語りかけをされることがあった。

普通に話せば済むであろうことでもキツめの口調で語りかけられることも。

すべての人たちがそうだったわけではない。また、こういったことを起こす者であっても

いつでもというわけでもない。

もともとその現場特有の情報などの伝達の習慣として一定量根付いていたことに加え、その部署が忙しくなっている時期で苛立ちもあったのだろう。

これらの事情は俺に新たな能力を要求することになる。

その現場でうまくやっていくための、相手の機嫌の把握と、不機嫌な者とのやり取りをうまくこなしていく能力を。

それも、俺自身が抱えている、薬を必要とする不安定要素の状態で、である。

残念ながら、というべきか、今思うとそれ系の十分な能力は、俺には無かったのだろう。

体の動きが重くなったり、なぜか動きが弱まる感覚を覚えるようになった。

日常生活でも、仕事でさえも。

その上、自分の状況を口にできるかどうか

分らない状況がより一層俺を不安定にさせた。以前、俺の不安要素に関して、同じ部署の者からこんなことを言われたことがあった。

「精神的に不安定といっても、会社に来れないわけじゃないんだろう。」

だったらこの部署と仕事に慣れてみようよ」

この言葉自体は俺がその部署に配属されて間もない頃に、自分の状態を説明する過程で出てきたものであり、俺は挨拶の一部として認識していた。

だが、今は――

その場に来ることができたとしても、その場でどんな動きでもできるわけではない。

状況によっては通常通りの動きや働きができなくなっている場合もある。

それを分かってほしい――

日に日にそんな考えが強くなっていった。

その考えが実現するかどうかは、怪しいものだった。

実際その後のある日もまた、誰かの苛立ちが発生した。

また、不機嫌さが俺を襲ってくる。

別に俺は誰かを批判するつもりはない。

ほんの少しでいいから言葉を選んでほしい。

俺の願望はそれだけなんだよ。

そのささやかな願望も叶いそうにない、な。

願望を口にすることさえ、許される状況とは思えないな。

あーあ。こんな状況では、体の動きも良くすることは出来ないな。

ある日の休日。

朝、体温を計った。

発熱は無い。

今後の生活を考えるだけで体調不良が起きて

しまうことも多いが、今は体調不良は起きていない。

幸い今日は落ち着いて動くことができそうだ。今はまだ、新型コロナウイルスに注意すべき時。万が一感染の可能性を考慮すべき体調の変化があれば、周囲に感染を広げないため行動を制約する必要がある。

俺は近所のショッピングセンターに出かけた。購入予定の商品をレジで清算する。店員さんが機器の操作をしている様子を見ていた。

その上で俺は考え事をしていた。

（ん？）

体に何かを感じ取った。悪い意味での何かを。（ヤバイ！こんなところで倒れたりしたら、新型コロナウイルスに感染していると周囲に思われるかもしれない。）

何とか不安になることを考えないようにしないと）

俺が購入する商品のレジでの清算が終わった。その後、持参したマイバッグに買った物を入れようとしたそのとき――

「ううっ」

（その時が来てしまったか。こん…な…ところ…で…）

買った物を入れるための台をつかもうとしたがうまくいかず、その場に倒れるように座り込んでしまった。

「お客様、大丈夫でしょうか？」

女性店員が声をかけてくれた。

俺はすぐには立ち上がることができなかった。

「だ、大丈夫です。急に具合が悪くなったもので…」

どうにか返答する俺だった。

周りも気になる。

この時勢、新型コロナウイルスがらみということで、具合が悪いのに無理して出かけること自体、好

ましくない行為とされる。

周囲の人たちに、好ましくない行為をした者という認識は与えたくない。

俺は体に力がうまく入らない状態で、それでも人々への不安を与えないようにしようと、さりげなく周囲に聞こえるほどに大きめの声で答えた。

「出かける前には発熱はないし、気分がすぐれないということもなかったのですが、いきなりだったんです」

俺は立ち上がりながら答えた。

その後、俺は荷物を持って自分の車へと戻った。

どうにか戻ることはできたが、ここへ来た時より状況は悪くなっている。

安全運転のために少し休んでから行こう。

しばらくして体調が回復したため、俺は車を運転して自宅に戻った。

この日までだった。俺がどうにか無事でいられたのは。

翌朝。発熱こそなかったものの、体の動きが今一つ。

また、憂鬱な日々の始まりかよ。

体調維持のため、イヤになるようなことは考えないようにしよう。

そう思っていたが、予防策にもならなかった。自分自身に考えることをやめさせようとしても、頭も体もいうことを聞かないのである。

そもそも、考えないようにしようと思う方が非現実的だった。

生活に深く関わることを考えないで済ませられるものだろうか？

結局、「予防策」は効果が無かった。

朝食を取ることはできたものの、普通に食べただけで気分が悪くなってしまっているのである。

その様子は、同居している両親が一目で異常

を感じ取れるほどだった。

万が一、俺が新型コロナにかかっていた場合を考慮し、会社に連絡を入れた。

忙しい現場とはいえ、さすがに状況からして出勤を控えるようにと返答があった。

その後、前もって自治体が公開していたガイドラインに沿って医療についての関係機関に連絡。

各方面とのやり取りの結果、新型コロナではないと判断された。

それを知った両親は安堵した。もちろん、判断を聞いた俺も。

しかし、である。

判断に必要なだろうということで、俺は関係機関に自分の身体状況を伝えた。

その過程で職場についても話をしてみた。

その結果――

「症状からすると、度合いによっては専門的な

ところに相談した方がいいかもしれない」

そういったことも告げられた。

その内容の詳細も俺は両親に告げた。

両親はしばらく黙っていた。息子にどう言葉をかけていいか分からなかったのだろう。

職場にも詳細を告げた。

新型コロナではないということは良かったが、他の気がかりな要素については分かり次第、連絡してほしいとのこと。

やがて気がかりな要素についても判明した。

先日、一部のところで話に出てきた「専門的なところ」に相談し、深く調べてもらうことになった。

お世話をいただいたところにはありがとうと感じている。

判明した内容については：

精神的不安に伴う症状から、しばらく休養が



必要との診断だった。

両親にそれを知らせた。

二人とも始めは言葉を詰まらせていたが、やがて父さんはこう言った。

「あれこれ言ってみたところでどうにかなるものではないさそうだし、ゆっくりしているのいいだろう」

父さんの表情は険しく、しかし、俺のことをきちんと考えて言葉を選ぶようにするものだった。横でそれを聞いた母さんは、似たような表情でうなずくようなそぶりを見せた。

俺に自分の考えを伝えようとする形で。

今後について話し合うために職場にやってきた。

上司は人員が欠けるのは痛いところだが、やむを得ないという様子だった。

また、顔を合わせた同僚たちもこの時ばかりは誰一人、このときの俺の一連の言動を責める

様子はなかった。

少なくとも当面の間は俺にダメージを与えるおぞましい要素は来そうにないこと、そして、何とか周囲の理解を得られたということで、俺は安らぎが得られたような感じがして、少しは動きが軽くなった。

だがこのとき、俺も両親も知ることはなかった。

同僚の一部が俺を、「インディステインクト

プラスキュー  
＋ Q」と認識していたことに。

工員らしき者、といった感じで。

休養中、俺は自宅でネットを使っているときだった。

自分の勤務先について、人間関係がよろしくないという表示がちらほら見受けられるようになった。

俺の名前こそなかったものの、先日、ある店舗で倒れかけた者がいること、それが人間関係に起因するストレスによるものだという書き込みもあった。

すぐに体調は回復したとはいえあれだけ派手に姿勢が崩れたのだから、俺の本名や勤務先を知っている者や、同じ会社に勤務する者に知られても不思議はない。

現場となった店舗についても、おぼろげながら触れている内容もあった。

俺が新型コロナや他の病気にかかっている可能性について語っている書き込みなどの内容は無かった。

新型コロナについては、あのときそれとなく自分のその日の体調を周囲に伝えるように声を出したことが幸いしたのか。

それについては不明だが、声を出してみたのは良かったかもしれない。俺はそう思っている。

さらに体調不良を招く人間関係の話が話題になった理由は他にもあった。

程度や所属は俺と同様かは不明だが、俺の勤務先の会社ではこれまで他にも仕事や人間関係が原因で相応の事態に陥った事例が何度もあった。

会社を去った者もいた。

過去を含めた会社の負の面が、俺の一連の行動がきっかけで注目されるようになった。

だからこそ、今でも何人かの男性の同僚が会社でこんな話をしていた。

新型コロナに対する感染予防のためのマスクを通して発せられる声の数々。

「アイツが大勢の前で相当ヤバそうなことになり、会社が目立つきっかけになっちゃったな」

「ああ」

そして一人の同僚がこう言った。

「アイツの考えや頭の中の状況はともかく……」

これもある種の工作員、になってしまうかな」

その同僚は続けた。

「この会社を悪い意味で注目させる、という意味でのインディステインクト+Q、と言った感じの」

インディステインクト + <sup>プラスキュー</sup>Q ——

インディステインクト (indistinct)、英語で形状などが不明瞭な、といった感じの意味がある。

+Q については、クエスチョン (question) から、人々がいろいろ追求してみたくなるほどの興味を寄せ付けてしまう要素も含まれるといったことを表すようだ。

すべてがそうというわけではないが、インディステインクト+Qと呼ばれる者の中には、

作戦の実行後、失敗した場合のみならず成功したとしても、寂しげな様子で自らの手で人生を終わらせる者が少なくない。ただ、すべてが人生を終わらせる者というわけではない。

それも人々の興味を引きやすくなっている。

工作員という表現が適切かどうかわからない形式で、かつ工作員のようなインパクトを与えるほどの言動を取った者をこう呼ぶようになったと考えられる。

但し本職の工作員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディステインクト+Qと呼ばれることもある。

そういったところでは定義があいまいなところもある。

俺の知らないところで、俺はある意味工作員とされている。

インディステインクト+Qという言葉自体は

聞いたことがあった。

大規模な事件を起こした者がそう呼ばれるようになった事例もあった。

一方、作業員と呼ぶには規模が今一つのケースもあった。

同僚たちの会話については知るよしもなかったが、それとは無関係に最近の自分の言動を振り返ってみた。

ニュースなどで見聞きすることがある、インディステインクト+Qという単語。

その時の出来事が壮絶なものが多く、いつの間にか頭の中に入った単語。

俺の場合はどうだろうか。

俺は仕事を意図して行動を取ったわけではない。

作業員と呼べるほどの大規模な作戦を立案・実行をしたわけでもない。

解釈の仕方次第では会社を悪い意味で注目さ

せたということにはなるかもしれない。

そういう意味では作業員になってしまったと言えなくもない。

店舗で引き起こした出来事については、人々に一定量のインパクトは与えてしまったと言えなくもない。

だが、作業員と呼ばれるにはあまりにも無様などころが多すぎる。

ここで俺は、改めて同じ部署の者との挨拶で出てきた言葉を思い出した。

「精神的に不安定といっても、会社に来れないわけじゃないんだろう」

さすがに欠勤の相談のためにきたときにそんな言葉を言う者はいなかったが。

俺は改めて思った。

その場に来ることができたとしても、その場でどんな動きでもできるわけではない。

状況によっては通常通りの動きや働きができ

なくなっている場合もある。

そんなことを、改めて。

さらに今はこんなことも考えている。

こんな俺じや、作業員などとても勤まりそうにない。

工作のために目的地に來たとしても、高度な工作行為はどうにもできない。

会社側や現場が求める能力がままならない状態を過ごした結果、作業員と語られている現象。作業員を必要とする機関が使いたいとも思わない自分。

もし俺が知っていたら、どう反応しただろうか？

作業員扱いした同僚たちに立腹や恐怖などを感じたのだろうか？

それとも……

こんな自分を作業員扱いしたことをむしろ滑稽だと笑うのだろうか？

俺は複数の同僚から、ある意味の作業員と思われていることは今も知らない。

しかし、これだけは知っている。

休養期間が終わる前に、会社と話し合いが必要になることを。

そして俺は、これも必要だと思って考えている。

現在俺が、部署の関係者に抱いている感情だが……

俺をヤバくするような言動を取る者はいたが、現時点では特定の人物を批判するつもりはない。部署の習慣や現在の多忙な状況など、何かしらの事情があった。

そして言動を取る者についても、いつでも俺に対して不安を招く接し方をしていたわけではなく、問題なきケースも多かった。

特に俺の休養に関して俺に対しては、これと

いったやバさが無さそうだった。

これらのことを考えると、あれこれいうわけにもいかないかも、と、複雑な感情を抱いている。

復帰後の自分についてもあれこれ思いが浮かんでくる。

「工作員」として活躍する自分を想像することも思い浮かばない。

「インディステインクト+Q」になった自分ではなく、今後、生活していく自分を考える必要がある。

そのことが頭の中に浮かぶと……休養中だが完全な状態ではいられそうにない――

(終)

著者 庫発りべるき

発行 データコーディネートフォルダー

二〇二一年一〇月三一日

(C) Kohatsu Riberuki 2021

